

北陸断想

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

5月21日から23日まで、日本に来て聖公会の教会や学校などで働いている、韓国出身教役者の例年の集いに参加しました。それぞれの教役者が働いている教会と地域を訪ねて、その地域での宣教の取り組みから学び、共に祈り、交わり合うことがこの集いの目的です。久しぶりに母国語で自由に喋り合うことも、あえて言わないもう一つの喜びです。

実はこの集いは、以前私が立教大学のチャプレンとして勤めていた頃(2000～2010年)、日韓協働委員会の一員として日本聖公会の管区との協議を通して創設した会でした。その背景として、2004年に日韓両聖公会の公式宣教協働と交流から20周年を迎えて、福岡で記念大会が開かれました。両聖公会の聖職や信徒代表らが出席されたこの大会中に、日本の主教会から出された提案を韓国側が引き受けました。翌年から「日韓聖公会宣教協働者招聘・派遣プロジェクト」が立ち上げられ、私は初代委員として携わりました。このプロジェクトを通して11人の韓国聖公会の教役者が日本聖公会の各教区に迎えられ、2004年の時点でわずか三人だったのが、プロジェクトの第1期終了を遂げた2009年には、合計14人まで増えていたのです。これを踏まえて、「在日韓国聖公会出身教役者会」を組織し、例年の集いをも立ち上げることになりました。現在は、計20人のメンバーが9つの教区で働いています。

今年の開催地は、中部教区の新潟聖パウロ教会でした。主催側の丁寧な準備とおもてなしに感心しながら、新たな気付きや学びの多い集いでした。中でも、拉致問題でしばしば話題に上る新潟ですが、当の現地ではそういった一般のイメージを乗り越えるための、稀かつ貴重な取り組みがなされていました。聖パウロ教会の信徒と日本キリスト教教団の信徒との協力で、新潟の名産品であるお米のコシヒカリを、なんと隣国の北朝鮮に人道支援として十数年間送り続けてきたのです。それに、街のいたるところで目に入る「柳都」という言葉にも、私の名前との妙なご縁を感じながら(柳京)、惹かれました。70年代、この柳の都=新潟市を通過して祖国に帰還された在日の人々が、日本を離れながら柳の木を300本ほど埠頭に通じる道路の両側に植えて、それ以降この通りは「ボトナム(柳)通り」と呼ばれています。そして、今は国交正常化から遠ざかっている北朝鮮の平壤も、かつてから柳の町と呼ばれていたことを思い出しました。新潟での取り組みでうかがえる優しい心と、しなやかな柳の枝のように、日朝関係や、東アジア全域で平和の糸口がつかめることを祈りつつ、久しぶりの北陸を後にしました。

「流れのほとりに植えられた木のように、時が来れば実を結ぶ」(詩編1:3)